慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	初期ウィリアム・ジェイムズの「意識」論 : スペンサー心理学への応答を中心に
Sub Title	William James' early views of "consciousness": focusing on his remarks on Spencer's definition of mind
Author	岸本, 智典(Kishimoto, Tomonori)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2011
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.71 (2011.) ,p.15- 29
JaLC DOI	
Abstract	This paper examines William James' early philosophy of mind. As he expressed it in his articles, especially in "Remarks on Spencer's Definition of Mind as Correspondence" and "Are We Automata?", James' account of consciousness has been quite influential in psychological and philosophical arguments ever since. However, they have often ignored his teleological arguments, and overlooked the important conception of him, "Interest." Also, this article discusses James' thoughts on "consciousness" as "forum." "Good involves the notion of less good, necessitates comparison, and for a drop of water either to compare its present state with an absent state or to compare its total self with a drop of wine, would involve a process not commonly thought of as physical. Comparison requires a tertium quid, a locus–call it what you will–in which the two outward existences may meet on equal terms. This forum is what is known as a consciousness", he said. We can understand what he's implying here as follows. That is to say, Value or Truth appears with the birth of Consciousness simultaneously. The traditional interpretations of James' thoughts have indicated that his positions on philosophy were wavering. In this article, however, it is implicitly claimed that he consistently think about consciousness from a teleological standpoint from the beginning to late days.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000071-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

初期ウィリアム・ジェイムズの「意識」論

――スペンサー心理学への応答を中心に――

William James' Early Views of "Consciousness"

—Focusing on his Remarks on Spencer's Definition of Mind—

岸　本　智　典*

Tomonori Kishimoto

This paper examines William James' early philosophy of mind. As he expressed it in his articles, especially in "Remarks on Spencer's Definition of Mind as Correspondence" and "Are We Automata?", James' account of consciousness has been quite influential in psychological and philosophical arguments ever since. However, they have often ignored his teleological arguments, and overlooked the important conception of him, "Interest."

Also, this article discusses James' thoughts on "consciousness" as "forum." "Good involves the notion of less good, necessitates comparison, and for a drop of water either to compare its present state with an absent state or to compare its total self with a drop of wine, would involve a process not commonly thought of as physical. Comparison requires a *tertium quid*, a *locus*—call it what you will—in which the two outward existences may meet on equal terms. This forum is what is known as a consciousness", he said. We can understand what he's implying here as follows. That is to say, Value or Truth appears with the birth of Consciousness simultaneously.

The traditional interpretations of James' thoughts have indicated that his positions on philosophy were wavering. In this article, however, it is implicitly claimed that he consistently think about consciousness from a teleological standpoint from the beginning to late days.

はじめに

本稿は，筆者の以下の関心に基づく研究の一環である。すなわち，「意識」（consciousness）という主題について，またそれに関わるその他様々な主題である感覚，知覚，経験，自我，価値，宗教などについて，19世紀の後半から20世紀の初頭にかけて広範な議論を展開したウィリアム・ジェイムズ（William James, 1842–1910）の思想形成をたどることで，「意識」を問題にするとはいかなることか，そう

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻後期博士課程

した問題の仕方がいかなる意味を持ち，またいかなる困難を孕むのかということについて検討しようとする探究の一環である[1)]。「意識」を問題にするということはジェイムズにおいて，「目的」を問題にするということであった。一般的にジェイムズ思想の展開に関して，彼はその後期において，すなわち1890年代の半ばになって，初期の思想において保持していた心身二元論を棄却したと言われる。これは確かなことであるが，彼が棄却したのは「意識」を実体として認める考え方であって，「意識」や「目的」を問題にするということ自体を否定したわけではないということには注意しておくべきである。本稿で扱う彼の初期の議論は，「目的」を問題にしながら「意識」について語る，あるいは「意識」を問題にしながら「目的」をについて語るという彼の哲学を通底する議論の萌芽と位置づけることができる。

19世紀の終わりから20世紀初頭にかけての時期は，自然科学における新たな事実の発見やダーウィンの『種の起源』の出版（1859年）による影響も受けて，教育学の科学化（教育科学化）が進まんとしていた時期である。まさにその時期はジェイムズが学者として活躍していた時期と重なる。一般的にジェイムズの思想としては，後期の「プラグマティズム」，「根本的経験論」などがよく知られるが，それに反して初期において，言ってみれば進化論論争に巻き込まれる形で彼が展開していた思想，例えばハーバート・スペンサー（Herbert Spencer, 1820–1903）に対する批判などは見過ごされがちである。本稿では，初期ウィリアム・ジェイムズの「意識」論を検討し，とりわけ彼の初期の目的論的議論に着目することで，上記のような時代のなかで彼がどのように思想的に応答したのかを示す。

我が国の教育学研究においてジェイムズの心理学，哲学思想を扱ったものではまず菅野文彦の研究がある[2)]。菅野は「新教育」思想史にジェイムズを位置づけるという課題のもと，ジェイムズ思想を初期から晩年に至るまで丹念に整理している。また，柳沼良太は『プラグマティズムと教育』のなかでパース（Charles S. Peirce, 1839–1914），デューイ（John Dewey, 1859–1952），ローティ（Richard Rorty, 1931–2007）とジェイムズのプラグマティズムとの共通点，相違点を指摘しながら，主にローティのプラグマティズムに拠って今後の教育学におけるプラグマティズムの可能性を肯定的に捉えている[3)]。これらの研究はジェイムズの全体像を把握した上で，思想史ののなかに彼を位置づけるという方向性を持ったものである[4)]。こうした研究に対して，本研究も長期的にはジェイムズ全体像の把握という目的を含みもつものであるが，筆者はとりわけジェイムズ思想の内在的な展開に，すなわち，初期に彼が抱えていた課題との格闘のなかで彼は「プラグマティズム」や「根本的経験論」に至ったと理解しうる彼の思想形成上の展開に着目したいと考えている。

この初期にジェイムズが抱えていた課題こそ，筆者が本稿で着目する目的論の問題である。彼の初期の議論において，すなわち彼が後になって棄却する心身二元論を依然保持していた時期の議論においては，目的論が強く現れており，それはとりわけスペンサー心理学の批判的検討をおこなっている論のなかに典型的に現れている。こうした論のなかで重要な役割を担っている語が「関心」（interest）である。本稿では，「関心」概念を軸に展開される，「意識」に関する初期ジェイムズの目的論的議論を検討する。

「教育」という言葉が，本来的かつ狭義には社会的行為を表す概念である限り，教育学の学的営為のなかにおいて「目的」を問題とし続けるということは，教育学者に与えられた一つの要請であると筆者は考えている。もちろん「教育」という言葉を，働きかけを伴わない現象や事象であると捉える立場からすればこうした要請は生じないだろうが，「教育」を働きかけ，方向性を伴った行為概念として捉え

るならば，「教育」を学の対象とする際に「目的」を問題にすることは必然的に要請される。「目的」を伴わない出来事は「行為」とは呼べないからである。しかしながら，本稿が取り扱う哲学者・心理学者ジェイムズが時代状況と応答しあいながら哲学的議論を開始した19世紀後半という時期は，こうした「目的」に関する議論の枠組みが大きく変質した時期でもある。もちろん背景にあるのは，それまでの進化論的議論が一定の成熟をみて，思想的影響力を拡大したということがある[5)]。本稿においてこうした目的論の変容を精緻に議論することは不可能であろうが，本稿でジェイムズによるスペンサー批判を取り上げることの意味は，こうした当時まだ進行中であった進化論的議論の一端にあらためて光を当てるということにも見いだせる。何となれば，スペンサーの進化論と目されるものの影響力はアメリカ合衆国という土壌において極めて大きいものだったといえるからであり，それは現代のわが国における思考にまで思想的影響を色濃く残しているといっても過言ではないからである。

19世紀後半における目的論の変容は，それ以降，現代に至るまでもわれわれの学的認識・日常的認識を強く規定していると考えられ，そうした思考枠に関する検討は哲学や心理学においてのみならず，教育学においても重要な課題なのではないだろうか。教育学において，従来からも目的論は議論されてきたが，進化論のインパクトを経ての目的論の変容を主題とした研究は少ない。本稿が扱うジェイムズという思想家はまさにその目的論の変容の渦中にいて，進化論のインパクトに同時代的に反応していた人物である。彼の当時の議論を読み解くことで，「意識」について当時何が問題となっていたのかが明らかとなってくるだろう。

本稿の第3節から第5節では，以上のような課題意識のもとその射程の一端に捉えられたジェイムズによるスペンサー心理学批判の内容を検討し，その意義を考察する。それに先立って第1節ではジェイムズ思想の時期区分を示し，本稿における「初期」という言葉が指し示す時期を特定する。第2節ではそうした初期ジェイムズ思想において，哲学と心理学の関係が如何に考えられていたかを読み解くことで，初期における彼の思想に内在する学問論的前提を確認する。

1．ジェイムズ思想の時期区分

彼の生涯の時期区分（また，それを含む自伝）は，それが経歴を紹介した履歴書的なものであれ思想展開の時期区分であれ，ジェイムズの伝記として今でも定評のあるペリーのもの（1935年）[6)] から，家族関係の新たな面などにも言及しつつジェイムズの生涯の全体像を描くリチャードソンのもの（2006年）[7)] に至るまで多く存在する。歴史的史料に基づいて思想史的事実を把握することを完全に試みることは本稿ではとても扱いきれない問題であり，また，テーマ的にも方法論的にも大きく異なったものとなってしまうので，ここでは概略的な（しかし後の議論との整合性を鑑みても十分に信頼し得る）時期区分のみを行うこととする。手がかりとしては，ジェイムズの心理学から哲学への思想展開に関する最近の見解として，デイヴィッド・ランバースのものを取り上げることにする。

1999年に出版された『ウィリアム・ジェイムズと経験の形而上学』の中の第2章「心理学から宗教へ：1890年代における純粋経験と根本的経験論」においてランバースは，ジェイムズが研究関心の中心を心理学から哲学及び形而上学へと移した時期を，一般的に言われる1900年代初期ではなく，1895年前後であると論じている。

> ジェイムズの見解を体系的に扱うことはこの書の全般的な目標の一つであるが，私はまた，彼の

哲学的見解の展開についての特定の歴史的議論を提言してもいる。すなわち，彼の根本的経験論者としての世界観の大部分は1900年代の初期というよりはむしろ，1890年代に形成されたというものである。この解釈はジェイムズの思想を理解する上でそれ自体重要な意味を持つ[8)]。

1900年の初期といえばジェイムズが『根本的経験論』に収められる論文を発表し始めた時期である。一般的には，ジェイムズの根本的経験論の見解はこの時期からのものであると考えられがちであるが，ランバースはこの考えに疑義を呈す。

選択的ではあるが厳密なテクスト分析によって私は，根本的経験論者の世界観（*Weltanschauung*）へのジェイムズの決定的な移行は1895年の終わりまでに為されたと主張する。その年は，彼の形而上学的世界観の公的なデビューとしての二つの決定的なエッセイが発表される丸9年も前である[9)]。

ここでの「彼の形而上学的世界観の公的なデビューとしての二つの決定的なエッセイ」とは，1904年に発表された「意識は存在するか」（“Does Consciousness Exist?”）及び，「純粋経験の世界」（“A World of Pure Experience”）の両論文のことである[10)]。さてでは，いかなることを根拠にランバースは「1895年の終わりまでに」というように時期を特定しているのだろうか。彼は以下のように述べる。

「事物を一緒に知ること」（“The Knowing of Things Together”）はアメリカ心理学会におけるジェイムズの会長講演のためにまとめられ，1894年12月に述べられたものである。それは1895年の3月の雑誌『心理学レビュー』（*Psychological Review*）に載せられた。（…）そのテクストは二つの理由でとりわけ重要である。第一に，それは『心理学原理』における（そしてその延長としては『心理学要綱』における）ある致命的な諸前提条件を顕著に拒否しているからである。そして第二に，それは公に，ジェイムズの後に「根本的経験論」と名付けられるもののいくつかの基本的な特徴を呈示しているからである[11)]。

『原理』期における諸前提の拒否及び根本的経験論の萌芽に関して「事物を一緒に知ること」の論文で論じられている問題は，「いかに考え（thoughts）が結びつくか」という問題である。この問題をジェイムズはキャリアを通じて長々と論じているとランバースは言うが[12)]，この問題との格闘の一定の結論として，ジェイムズは根本的経験論の世界観へと至ったというのである。

さて，「事物を一緒に知ること」における表明で二元論を棄却し，根本的経験論へとジェイムズ思想は展開したといわれているが，1894年のその表明以降，そうした世界観が維持されたという根拠はどこにあるのか。ランバースは，ジェイムズが当時受け持っていたゼミナールの講義資料に着目する。

1890年代の最初の半期におけるジェイムズの教授記録は，心理学的問題や方法から哲学や形而上学へと焦点が徐々に移行されていったということを明示している。先の会長講演の後の1895年から1896年にかけての大学年間においてのジェイムズの心理学ゼミナール（“Philosophy 20b: Psychological Seminary—The Feelings”）は，ジェイムズが以前に見解として保持していた「相関」

（“correlation”）の疑問を取り上げるというよりはむしろ，心理学の形而上学的な土台に関連した問題に直接的に注意を集中するものだった[13]。

このように，講義資料に着目することで，ジェイムズのこの時期の関心事は「心理学の形而上学的な土台に関連した問題」であったといえるとランバースは論じている。1894年に公表された「事物を一緒に知ること」で示されたジェイムズの根本的経験論の世界観は，続く年の1895年から始まる彼の講義において維持され，さらにはっきりとしたものとなっていったと言うわけである。ここへきてジェイムズの思想展開に関する歴史的考察の結果少なくとも判断されうることは，さし当たって以下のようにまとめることができるだろう。

まずジェイムズは1878年の「スペンサーの心の定義に関する意見」という論文[14]において公的に哲学研究を発表し始めた。そして，この年は『心理学原理』を執筆し始めた時期でもある。『原理』は1890年に出版されたが，その12間の時期において，「意識」に関する哲学的，形而上学的な疑問が噴出することになった[15]。『原理』出版の二年後である1892年に，その短縮版，教科書版である『心理学要綱』が出版された。この書の序章及び終章は，心理学研究に関するジェイムズの見解における一定の結論を提出したものでもある（本稿第2節参照）。その後，一般的には「根本的経験論」の世界観がジェイムズにおいて表明されたのは1897年に出版された『信ぜんとする意志』の序文であると言われるが[16]，史料に基づくと1895年の段階でそうした世界観ははっきりと現われており，それは1894年の論文「事物を一緒に知ること」における二元論の棄却以降続いている見解である。

よって，筆者の研究において「初期ジェイムズ」という場合には，基本的には1892年の『心理学要綱』出版までのジェイムズということを意味しているが，ある程度まで二元論を維持していたとされる1894年の段階までを意識に入れつつ，「初期」という言葉を用いている。

2. 初期ジェイムズにおける「心理学と哲学」

「ジェイムズの最も広く認識されている業績のひとつは，19世紀後半における心理学の変遷に貢献したこと，つまり哲学の下位学科から自然諸科学のなかの独立した領域へと移し変えたという貢献である」[17]。ランバースはこのように述べ，ジェイムズの心理学に対する貢献を示す。が，このことは同時に自然科学として独立した心理学につきまとう限界についての指摘も内包している。このことについてここでは詳しくみていくことにしよう。

ジェイムズは『心理学原理』の冒頭において次のように言明する。

> この本は，考えや感情は存在し，それらは知識の乗物であるということを仮定しているが，その結果以下のことを強く主張することになる。すなわち心理学は，様々な考えや感情と脳の一定の状態との経験的な相関は確かめることができるが，それ以上先へは進むことができない，一自然科学としてはそれ以上先へ進むことができないということである[18]。

ジェイムズにとって自然科学としての心理学の行いうることはあくまでも「心的現象そのものの記述および説明」であって，「なぜ心的現象は生じるのか」，「なぜ意識状態と脳（身体）の状態が関連しているといえるのか」といった疑問に対して答えるのは心理学ではなく，形而上学であると彼は考えて

いた。ランバースも，「(…) 自然科学としての心理学の仕事は実際には二つあることになる。一つには，特定の心的状態（考えと感じ）と特定の脳の状態とを経験的に観察可能で実証可能なラインに沿って記述的に分類しなければならないということがある。二つ目は，これら心的状態と脳の状態をもう一度経験的なラインに沿って相関付けなければならないということである」[19] ということを確認している。以下ではジェイムズ自身の言明を中心に，この問題に関してさらに詳しくみていくことにする。

ジェイムズは心理学を自然科学（natural sciences）の一つとして取り扱っている[20]。これはどういうことだろうか。「諸科学」（sciences）をジェイムズは暫定的端緒であるという。

> 大抵の思想家は，すべての事物に関する科学（Science）は根底ではただ一つあるのみで，すべてが知り尽くされるまでは何一つとして完全に知ることはできないという信仰をもっている。このような科学は，もし実現されたとすればむしろ哲学（Philosophy）であろう。(…) 代わりにわれわれは，異なった場所で生じ，ただ実際上の便宜のためにお互い分かれ分かれになっている知識の端緒を数多くもっている。これらが今後発達して，最終的には一つ真理の体系に合体するかも知れない。われわれはこれらの学問の暫定的端緒を，複数形で「諸科学」（'the Sciences'）と呼ぶ[21]。

つまり，ジェイムズは学問の出発点において「科学」（sciences）と（形而上学としての）「哲学」をはっきりと分けている。「すべての科学は，一定のデータを疑うことなく受け容れ，その意義と真理を吟味することを哲学の他の部分に委ねている」[22] というように，「科学」が扱うデータ（＝自然科学的事実）はその根本の部分において，根拠となるところの吟味を（哲学の仕事である）認識論や存在論に委ねざるを得ない。「心の状態，およびそれが経験する認識に関する暫定的知識体系こそが，私が一自然科学としての心理学と称するものである」[23] といっているところからもわかるとおり，「心理学」はこうした「事実」を扱う「科学」の一分野として発展させられるべきものであり，こうした「科学としての心理学」と「心理についての哲学」が互いに学知を提供しあい，「心理学」が一つの真理の体系に向かって発展していくことをジェイムズは期待しているのである。

これらのことは『心理学要綱』の終章「心理学と哲学」においても再度強調されている。ジェイムズは「心理学ではその科学的目的のためには（*for her scientific purposes*）決定論が要求される（*claimed*）と率直に言っても誰も異論はないだろう」[24] と述べ，自然科学としての心理学は決定論を前提として確立されていくべきだとする。だが，それらはやはり「暫定的」，仮説的なものであり，その前提の検討を仕事とする（形而上学としての）哲学なしでは真理に到達することは決してできないということを指摘することも彼は忘れない。

> 心理学の決定論的仮定は単に暫定的（provisional）かつ方法論的（methodological）であるに過ぎない。(…) すべてこれらの特殊科学は，これ以外の真理全体から便宜上区別されているものであって，互いの特殊科学の必要に照らしてその仮定や結果を改訂（revision）すべきものである (…) [25]。

さて，ではジェイムズが考える心理学（科学としての心理学）の定義はどのようなものだろうか。ジェイムズは心理学の定義を，「意識状態そのものの記述および説明（*the description and explanation*

of states of consciousness as such)」[26] としている。ここで問題となってくるのが，その「意識状態そのもの」をいかに把握するかという問題，すなわちジェイムズが心理学の方法として採用する「内観法」(introspection) にまつわる問題である。『心理学原理』を中心にジェイムズの思想を読み解かんとするジェラルド・マイヤーズは，その著書『ウィリアム・ジェイムズ 彼の人生と思想』のなかで以下のように指摘する。

> 内観は名付け（naming）や分類（classifying）を含むものであり，単にある種の経験をしているというだけのものではない。例えば，嫉妬の感じ（単にそれを「持っている」ということ）は内観以前の気付きに記名されるものであるが，それを内観するためにわれわれはそれを名付けや分類を通して概念化しなければならない。誤りの可能性が内観法には常につきまとっている[27]。

このことはまさに，ジェイムズが1884年の論文「内観法的心理学に見落とされたもの」において問題にしたことである。内観法をめぐるこの問題は，この後も「意識」について探求しようとするジェイムズを悩ませ続けることになったが，そうした内観法という方法に対する反省こそ，彼の後期の立場への以降を決定付ける一大契機であったともいえる。後期においてジェイムズが「意識」を実体として立てることを避け，「意識」と「物」との二元論を採用しなくなることは，初期における彼の内在的な問題意識の反映であった。

さて，では次節から初期ジェイムズにおける「意識」論を詳しくみていくことにする。

3. 初期ジェイムズ思想における「意識」の目的論的構造

現代の生態学的心理学者・哲学者の代表であり，ジェイムズの思想に詳しいエドワード・リードは以下のように述べている。

> (…) ジェームズは，(…) 遺伝的に受け継がれた心の変異は認知する力ではなく選択する力に関してそれぞれ異なっていると論じている。どんな生き物も肉体を持って生きている限り，鏡のように単純に世界を映し出すことはできない。生きて活動するものは，環境の諸側面を選択して，それに注意を向け，それに働きかけ，さらにそれを改変することさえしなければならない。ジェームズによれば，実在のすべてであろうと一部であろうと，生き物が実在を鏡のように映し出しているという考えは，全く的を外しているのである[28]。

ジェイムズが心の能動性や選択性を強調しているということをここでリードが指摘するとき，彼が念頭においているのは1870年代後半から80年にかけてのジェイムズの論文である。では，その具体的な内容は如何なるものだろうか。

1878年の論文「スペンサーの心の定義」[29] においてジェイムズは，ハーバート・スペンサーの「心は対応である」という説に対して自らの考えを論じた。そこで中心的に論じられているのが「目的論」と「心的世界と物的世界の区別」であるが，そうしたジェイムズの論立ては彼の次のようなスペンサー理解の上でなされる。

スペンサーは彼の『心理学原理』第三部において，心的進化に関する最も基本的な真理は，それと最も近似した進化，即ち生命の進化と結びついているという仮説から出発し，生命の定義であったところの「内的関係の外的関係への順応（adjustment of inner to outer relations）」という信条が「心的進化の全過程」をも包合することを見出す。彼は一見極めて周到詳細な数章にわたって，心的完成の全ての異なれる段階は，空間，時間，特殊性，一般性，および統合性における，その順応或いは彼のいわゆる「対応（correspondence）」の程度によって表されることを明らかにしている[30]。

こうしたスペンサー理解の上でジェイムズは，スペンサーの「心」（mind）に対する言及は不十分であるという。ジェイムズは，スペンサーが「『心的進化の全過程』を包合すると公言する信条の中において，認識の現象だけを挙げて，全ての情操，全ての美的衝動，全ての宗教的情緒及び個人的感動を除外」していることを，まず批判する。われわれの心的活動における主観的な契機，それはわれわれが価値を問題にして生きているということも含むのであるが，そうした事実を見逃してはならないと彼は主張するのである[31]。

次に，スペンサーの心の定義における「対応」という言葉についての批判がなされる。彼によれば，スペンサーの「対応」という言葉には定義がなく，多くの同意語があるだけ，とされる。「適応している（adjusted）」，「合致している（conformed）」，「調和している（harmony）」などがそうである。しかし，これらの言葉は規定が曖昧であり，「狐は猟師に「適応」している」，「人間はチブス菌に「合致」している」，「森は火に「調和」している」などというような言い方もできてしまう。「対応」という語をもっと特殊的に規定することが必要である，とジェイムズは主張する。ここで書き換えられた定義は，「正しい或いは知性的な心的活動とは，考える主体の生存或いは少なくとも身体的安全を助けるような，内的関係及び反応を，外的関係に対応して確立することである」というものである[32]。この定義について，ジェイムズは「目的論的」という言葉を用いて次のように説明している。

このような定義は精確ではあるが，同時に端的に目的論的である。単純な心的活動と，正しい心的活動との間の区別を，明白に設定している。さらに一歩進んでその基準として，一定の理想的目的を提示している。――即ち身体的健全又は生存であって，動物の側に属する純粋な主観的関心（*subjective interests*）であり，動物とともに出現するもので，既存の関係に対応するものではない[33]。

ここで，「身体的健全」や「生存」だけを目的としてしまうことに非はないのかという疑問が起こるが，これに対してジェイムズは次のように述べる。

（…）ここにわれわれのディレンマがある。一人は，心的発達の法則は，恒存（conservation）の法則に支配されるといい，今一人は豊かさが心的進化の基準であるといい，又一人は，現実の純然たる認識が思考の本質であるという。しかし誰が我こそその何れが正しいかを決定し得るといえるだろうか。その審判者は，論争する人びとによって用いられると同様に主観的で個人的な，自分の標準をその場に持ち出さねばならないであろう。然るに何らかの方法で，異なれる心の表現の価

値を決定しようとすれば，何か標準がなければならぬ[34]。

では，その「標準」とはいかなるものだろうか。ジェイムズは「要請（postulate）」という言葉を用い，説明する。「各個人は，その好むところに応じて，理想の正しさ又は優越性とは何であるかについて，自分自身の無上命令を立てる，そしてこれらの異なれる理想は（…）保証に身を固めて登場するのではなくて，幾つかの盲目的な肯定として，互に盤上において勝敗を決するために現われてくるのであるというのが，真実であると思われる。それはせいぜい要請（postulate）であって，その妥当性を確かめるためには全体としての経験の一般的同意に頼らねばならぬ」[35]。このようにジェイムズは「要請」という言葉を用いつつ，目的論的に議論を進めている。

4. 「心的世界と物的世界の区別」とフォーラムとしての「意識」

先の議論では，一定の理想的目的は「主観的関心」，すなわち身体的健全や生存であるとされていた。しかし，「主観的」とはいうが，すべてを物的世界の出来事とみる見地に立った場合，「関心」は神経機能の働きに還元してしまえるものであり，究極的起源においては非心的なものである，とジェイムズはいう[36]。「関心」や「意識」に関して，ここでのジェイムズの議論は如何に組み立てられているのだろうか。この点について重要なことは，「外的存在」の見地と「意識」の見地を区別することである。例えば，脳と生存という目的との関係について考える。「外的存在」，すなわち脳という物質の見地に立つと，器官自身（脳）は物的，非心的であり，無関心であるといえる。この場合，生存という目的は単に「仮定」であり，「命令」ではない。この立場は，現象を外から記述するという立場である。一方で，「外的存在」ではなく内的存在，すなわち「意識」の見地に立つと，生存という「目的」は単なる「仮定」ではなく「命令」となる。ジェイムズは「考えの実在性」（the reality of a thought）について次のようにいう。「客観的事実即ちスペンサーのいう外的関係はただそれが感覚を制約するから，実在である。同様に力強く制約力を持つ関心は，凡て同じ権利をもって，実在である。本質において，考えの実在性は，それがわれわれを捉える捉え方に比例する。その強さ，その真剣さ――　一言にしていえば，その関心である」[37]。ここでジェイムズは，決してスペンサーのいう「外的関係」の実在を否定しているわけではない。「外的存在」の見地に立つと，それは確かに実在であるといえる。しかし，一度「意識」の見地に立つと「関心」の実在性も同様に主張することができる。ここではまだ「意識」が如何なるものかという説明が十分になされてはいないが，少なくとも，「関心」の実在性や考えの実在性の条件として「意識」が位置づけられていることがわかる。それは以下の言明にも現れている。

> （…）意識自体は（…）手段と，手段を評価する標準とを提供する。ただ究極の目的に奉仕する（*serves*）ばかりでなく，究極の目的を将来する（*brings*）――即ち目的を設定し宣言する。この目的は単なる仮説（hypothesis）――「もし（*if*）生存すべきであるとすれば，器官はこのように働かねばならぬ。」――ではなく，命令（imperative decree）――「生存が起こるべきである（*shall occur*）が故に器官はこのように働かねばならぬ（*must so perform*）。」――である[38]。

以上のような「意識」論について，ジェイムズがさらに詳しく論じたものが1879年の論文「我々は自動機械か」[39]である。意識が，手段となる（serve）とともに同時に目的も設定，宣言する（bring）

ものであるとはどういうことであろうか。こうしたジェイムズの「目的論」についてはこの論文でも繰り返し説明される。「(…) 有用な解発 (*useful discharge*), 適切な方向 (*appropriate direction*), 正しい反応 (*right reaction*) 等のような表現の意味を明瞭に了解していることを確かめておかねばならぬ。それらは全て, 善 (Good), 目的 (End), 或いは関心 (Interest) を動物が持つものと, 予想している」[40] とジェイムズは述べる。つまり, 善, 目的, 関心といったものがあって初めて,「有用な」「適切な」「正しい」という言い方が可能になるのであって, 目的が設定されるまでは, 少なくとも内的にはその反応の効用を測る標準がない, ということである。

> 善 (Good) は次善 (less good) の考えを含み, 比較 (comparison) を必要とし, 一滴の水がその現在の状態を現在ない状態と比べ, 或いはその全体を葡萄酒一滴の状態と比較することは, 普通には物的とは考えぬ過程を含んでいる。比較は, 第三条件 (*a tertium quid*), 場所 (a *locus*) (…) 二つの外的存在が同等の条件で相対するところのものが必要である。この集会場 (フォーラム) (forum) が意識として知られているものである[41]。

ここにおいてようやく「意識」が如何なるものとして捉えられているかがはっきりする。物的世界においては物的な関係でしか関係が説明できないような二つ以上のもののうち, どちらが「善い」のか, どちらが「正しい」のかということは,「意識」というフォーラムがあって初めて可能なのである[42]。「(…) かくの如く, 用途 (Use), 有利 (Advantage), 関心 (Interest), 善 (Good) 等の言葉は, 意識の存在しない世界には, 適用を見出しえない。そこにある物は善でも悪でもなく, 単にあるかないかである」[43]。このように, 初期のジェイムズにおいては物的世界と心的世界とが区別された上で, なおも心的世界の意義が強調され,「意識」の世界は実在が認められているのであるが, それは「フォーラム」として認められているのである。

5. 初期ジェイムズによるスペンサー心理学批判が持つ意義

この時期のジェイムズの「意識」論に対し, リードは「ジェームズが言うには, 関心を基礎にして比較するという個々の活動は,『意識として知られる』。しかもそれは, 単なる感覚や感じとして知られるのではなく, 選択や選好として知られるというのである」と述べた後, 以下のようにまとめている。

> (…) ジェームズが心は活動的であると言い, また心は真理の創造を助けると主張する場合, それは自然の外部にある活動, しばしば意識の活動として考えられてきたような活動を指してはいない。彼の言う心の活動とは, 自然の活動, すなわち関心に基づいた選択という心理的過程なのである。心理的な領域とは, 心あるいは精神という新世界ではないし, 観念という新世界でさえない。それは自然界の進化現象, つまり或る一定の諸要因が何度も何度も新たなやり方で切り出され, 比較され, 結合されてゆく, 自然界の自然現象なのだ[44]。

このリードによる初期ジェイムズの「意識」論の解釈にはやや誤解や混乱がみられる。リードは「心理的な領域とは, 心あるいは精神という新世界ではない (…)」と述べているが, これは誤解である。なぜなら, ここでリードが言及している時期のジェイムズは, 本稿でも示してきたとおり,「外的存在」

の見地と「意識」の見地を区別し，なおも内的な「意識」の領域の実在性を認めているからである。また，リードはダーウィン主義者としてのジェイムズの側面を強調するためか「自然界の進化現象」という言葉を用いているが，これも混乱を招きやすい。ジェイムズは，外的見地に立つときは確かにダーウィン主義者であるが，スペンサーの「心の対応」という考え方をそこからは価値の問題を語れるものではないとして批判する際には，「意識」の見地にも立つ目的論者となる。これは，価値の問題を語るためには「意識」をフォーラムとして捉える必要があるとジェイムズが考えていたことからもわかる。ジェイムズの外的見地に立つ進化論的立場，すなわちダーウィン主義的な立場は，スペンサーのような「心の進化」をただ一面的に捉える考えを批判するためであって，このときジェイムズは決して，リードがいうように心の活動が「自然界の進化現象」であるということを主張しているわけではない。

このように，初期ジェイムズの「意識」論は，その解釈に誤解や混乱が伴いがちであることからもわかるように，複雑を極めている。もちろん，ここに挙げたような誤解は一例に過ぎないのであるが，リードの誤解はある重要な点を示唆している。これは，本稿がなぜジェイムズ思想の「初期」に着目したのかということにも関わっている。つまり，ジェイムズ思想を，目的論を採用する「初期」とそれ以降の時期に区分しその上で「初期」において問題にされていたことを正確に理解しないと，われわれは，彼が用いていた「関心」概念の意義を見失い，彼を自然界，物の世界のみを考えるタイプの進化論者として一面的に理解してしまいかねないという点である。こうした誤解や混乱が残る理解のままでは，彼の後の思想である「プラグマティズム」や「根本的経験論」の適切な理解もありえないし，ジェイムズを思想の歴史のなかに位置づけるという作業も行いえないだろう[45)]。

したがって，ジェイムズ思想全体における彼の初期思想の意義について考察を深め，さらにはジェイムズを冒頭述べたような思想状況下に適切に位置づけていくためには，初期ジェイムズにおける目的論や「関心」概念の検討を含む「意識」論の検討は，必要不可欠な作業であると思われる。

※本稿において用いた略号に関しては以下を参照。

ERE：*Essays in Radical Empiricism*. The Works of William James, Cambridge, Massachusetts and London, England, Harvard University Press, 1976.

EPh：*Essays in Philosophy*. The Works of William James, 1978.

WB：*The Will to Believe*. The Works of William James, 1979.

PP：*The Principles of Psychology*. The Works of William James, 1981.

EPsy：*Essays in Psychology*. The Works of William James, 1983.

PB：*Psychology*：*Briefer Course*. The Works of William James, 1984.

ML：*Manuscript Lectures*. The Works of William James, 1988.

※引用文中において，原著のイタリック体は傍点（例：意識）を，原著の全大文字，頭大文字に関しては下線（例：諸科学）を付し，括弧内の原語で判断がつくように表現した。

※翻訳に関して，邦訳のあるものは基本的には既存のものに従ったが，文脈に応じて部分的に訳し変えた。

註

1) 筆者がジェイムズの思想について，現時点で関心を寄せている事柄は次のようなものである。すなわち，①ジェイムズは（1890年代中頃における）心身二元論の棄却以前には，「意識はフォーラムである」という考えや，目的に動機付けられて主観が世界を構成するというようなある種の目的論的な考えを保持していたこと，②心身二元論の棄却以後の『根本的経験論』の哲学においては，「純粋経験」（pure experience）という概念とともに「感じ」（feeling）という概念（それは「思考」（thinking）や「概念化」（conception）によって限定される以上の言語化困難な領域を認知するものであると考えられる）がジェイムズによって極めて重要な位置を与えられるようになること，③しかし当初から一貫して彼は，経験論的・多元論的出発点に立ち議論を進めていたということ（すなわち，すでに限定がかけられたもの（要素など）を統合的（synthetic）に寄せ集め全体を把握するという方向ではなく，その瞬間において与えられている全体から分析的（analytic）に把握するという方向をとるということ），この3点である。本稿はとりわけ①に焦点を当てたものである。

2) 菅野文彦「「新教育」思想史におけるW.ジェイムズ：問題の所在」，兵庫教育大学研究紀要，第14巻，第1分冊（学校教育・幼児教育・障害児教育），1994年2月，pp.57–69，など。

3) 「(…）ローティは，デューイの伝統を継承しながらも形而上学を徹底して拒否し，ポストモダンを取り入れながらもシニシズムやニヒリズムに陥らず，そして改良主義的リベラル左派の立場をとりながらも左右両派と実りある対話を続ける点で，今日の教育改革に多くの示唆を与えてくれるのである。」（柳沼良太『プラグマティズムと教育―デューイからローティへ―』，八千代出版，2002年，218–219頁。）プラグマティズム思想の系譜に関する柳沼の基本的な理解は，パースとジェイムズのそれぞれのプラグマティズムの相異なる特徴がともにデューイに流れ込み，それがローティによって批判的に継承されている，というものである。パースのものと異なるジェイムズのプラグマティズムの特徴については，それが「個人的な経験を重視」するところを強調している。「パースとジェイムズのプラグマティズムに根本的な相違点があることも確かである。特にパースの実在論的で主知主義的なプラグマティズムは，概念の対象に実際的な操作を加えることで得られる知的経験や協働探求を重視しているが，それに対してジェイムズの多元主義的で主意主義的なプラグマティズムは，実際的な結果を検証するものとして感情的・精神的な経験や個人的な経験を重視している。デューイは，パースと同様に，意味を明晰にする探究方法やコミュニティ性を重視する一方で，ジェイムズと同様に，知性，想像力，感情，意志の働きを含めた総合的な真理探究をも重視するのである。」（同書，212頁。）

4) ジェイムズの研究は教育学に限らず，様々な国，様々な分野において盛んである。とりわけ，1975年から1988年にかけての『著作集』（ハーヴァード大学出版局，全19巻）刊行以来，増加傾向にあるといっていいだろう。ここではそのすべてを取り上げることはできないが，筆者が重要であると判断したものを紹介する。デイヴィッド・C・ランバースの『ウィリアム・ジェイムズと経験の形而上学』（David C. Lamberth. *William James and the metaphysics of experience*. Cambridge University Press, 1999.）は，混乱しているとさえ評されるジェイムズの難解な哲学を一貫した経験の形而上学として解釈し，彼の哲学を批判的に検討している。また，本書はジェイムズ思想の時期区分についても，彼の講義資料（*ML* に所収）に着目することにより従来一般的とされてきた区分を検討し直し，具体的には，ジェイムズが「根本的経験論」の世界観を持つに至ったのは1890年代の中頃であるとしている（本稿第1節参照）。また，冲永宜司はその著作のなかでジェイムズの哲学を，とりわけ宗教と意識の問題に関して詳細に検討している。（冲永宜司『心の形而上学―ジェイムズ哲学とその可能性―』，創文社，2007年。）いずれの研究も，ジェイムズの哲学を細かく，さらに広く論じたものではあるが，初期ジェイムズ思想における目的論や意識の「選択性」に関する言及は十分とはいえず，そのため彼がスペンサーの何を，どのように批判したのかが見えにくくなってしまっている。この点が筆者の本研究との関心の違いであるといえるだろう。

5) 例えば佐藤康邦はダーウィン以降の目的論について次のように述べる。「19世紀におけるダーウィンの進化論からメンデルの法則を経て，20世紀における分子生物学に至るまで続く生命科学の発達のなかで，目的論にも転機が訪れる。自然選択や遺伝子情報の理論が機械論の最終的勝利を意味しており，目的論に止めを刺したという主張も行われている。また，たとえ目的志向的現象を認めたとしても，それはコンピューターのプログラム化と同列に捉えられるようなものであって，有機体論を擁護するものではないという主張もされる[…]。しかし，それに対する反論というものもまた執拗に繰り返されていることを忘れてはならない。進化論が自然の目

的論の再興を意味するといった主張はダーウィンの支持者のうちにも見られた。[…]機械論的科学からの挑戦を受けながらも，依然として目的論は今日的課題である。」（佐藤康邦「目的論」，廣松渉他編『岩波哲学・思想事典』岩波書店，1998年，1592–1594頁。）機械論的科学に対して目的論を擁護するという性格の主張は，本稿で扱う初期ジェイムズの議論のモチーフでもある。ジェイムズの議論や語りの分析を通じて19世紀後半における進化論的議論の内実にせまり，それが抱えていた問題を明らかにすることも，本稿を含め，本研究の以後の課題である。（他にもダーウィン以前以後の目的論の変容について論じたものは多い。例えば以下のようなものがある。フレデリック・フェレ「（神の存在の）目的論的証明」小林忠秀訳，フィリップ・P．ウィーナー 編『西洋思想大事典』平凡社，1990年，Ⅳ，412–421頁。ローベルト・シュペーマン／ラインハルト・レーヴ『進化論の基盤を問う』山脇直司・大橋容一郎・朝広謙次郎訳，東海大学出版会，1987年。）

6) Perry, Ralph B. *The Thought and Character of William James*. Boston, Little, Brown, 1935.
7) Richardson, Robert D. *William James. In the Maelstrom of American Modernism*. Boston, New York, Houghton Mifflin, 2006.
8) Lamberth, David C. *William James and the metaphysics of experience*. Cambridge, New York, Cambridge University Press, 1999, p. 61.
9) *Ibid*.
10) それぞれ1904年に，*Journal of Philosophy, Psychology and Scientific Method*の各雑誌において発表された。（ERE, pp. 3–19.及びERE, pp. 21–44.に所収。）
11) Lamberth, *op.cit*., p. 73.
12) *Ibid*., p. 73.
13) Lamberth, *op.cit*., p. 82. なお，“Notes for Philosophy 20b: Psychological Seminary— The Feelings(1895-1896)”は*ML*, pp. 212–230に所収である。
14) “Remarks on Spencer's Definition of Mind as Correspondence”, *Journal of Speculative Philosophy*, 12, 1878, pp. 1–12.（EPh, pp. 7–22.に所収）。註28も参照。
15) その12年の間におけるジェイムズの思想の重要な転換点となったのは，1884年に発表された論文である「内観法的心理学に見落とされたもの」（“On Some Omissions of introspective Psychology”, *Mind*, 9, 1884, pp. 1–26.（*EPsy*, pp. 142–167.に所収。））である。ジェイムズはこの論文以降，意識の「辺縁」（fringe）に関する理論を展開し，その考えは『原理』全体を（とりわけ「意識の流れ」論を）覆っていったのである。
16) この序文自体は1896年の12月に書かれたものである。そこにおいてジェイムズは当時の自身の哲学的態度について以下のように述べている。「問題の態度に簡潔な名称を是非ともあてがわなければならないとすれば，このような簡単な名称が哲学の場合くらい誤解のもとになることはないという事実にもかかわらず，私はそれを根本的経験論（*radical empiricism*）の態度と呼ぶべきだろう。「経験論」というわけは，事実の事柄に関するもっとも確かな結論すらも，この態度は，将来の経験の行程において修正されるかもしれない仮説と見なすことに甘んじるからである。また，「根本的」というわけは，この態度が一元論の学説そのものを一つの仮説として扱い，そこで実証主義とか不可知論とか科学的自然主義とかの名称で目下行われている，数多くの中途半端な経験論と異なり，一元論を，あらゆる経験がそれと合致しているものとして，独断的に肯定することはないからである。」（*WB*, p. 5.（『ウィリアム・ジェイムズ著作集2 信ずる意志』，福鎌達夫訳，1–2頁。））
17) Lamberth, *op.cit*., p. 63.
18) *PP*, p. 6.
19) Lamberth, *Op.cit*., p. 64.
20) *PB*, p. 9.（『心理学』上巻，21頁。）
21) *PB*, p. 9.（『心理学』上巻，21頁。）
22) *PB*, p. 9.（『心理学』上巻，22頁。）
23) *PB*, p. 10.（『心理学』上巻，23頁。）
24) *PB*, p. 395.（『心理学』下巻，319頁。）
25) *PB*, p. 395.（『心理学』下巻，319頁。）なお，この『心理学要綱』最終章においてジェイムズはその時点での心理学の状況について次のように表現している。「（…）現在のところ心理学は，ガリレオ，及び運動の法則以前の物理学，ラヴォアジェ，及び質量はあらゆる反応を通して変化しないという考え以前の化学の状態にある。」

（*PB*, p. 401.（『心理学』下巻，329頁。））これを受けてランバースは，「心理学が一自然科学として着手され得ることはもっともなことであるが，そのことは自然科学の仮定が概して明晰で，疑問の余地のないものであるということを含意してはいない。熱力学の法則のようなどんな実際的な（*practical*）法則も立てられなかったという心理学に特別に付加された失敗のことを考えれば，ジェイムズが指示した状況はますますもって致命的なものである。」（Lamberth, *op.cit.*, p. 71.）と述べている。

26) *PB*, p. 9.（『心理学』上巻，21頁。）

27) Myers, Gerald E. *William James. His Life and Thought*. New Heaven and London, Yale University Press, 1986, p. 66.

28) Reed, Edward S. *From Soul to Mind: The Emergence of Psychology from Erasmus Darwin to William James*, New Haven and London, Yale University Press, 1997, p. 205.（リード，エドワード・S『魂（ソウル）から心（マインド）へ―心理学の誕生』，村田純一・染谷昌義・鈴木貴之訳，青土社，2000年，283頁。）

29) この論文の初出は“Remarks on Spencer's Definition of Mind as Correspondence”, *Journal of Speculative Philosophy*, 12, 1878, pp. 1–12.である（*EPh*, pp. 7–22.に所収）。この論文はジェイムズが公に発表した実質的に最初の哲学論文である。なお，当時の思想史的背景と，ジェイムズの著作における問題関心との関わりについて，以下にリードの言葉を引用しておく。「ジェームズが重要な思想家として認識されるようになった時期は，新心理学とその実験室がヨーロッパに登場した時期と重なっている。彼が最初に公に向けて論文を書き始めたのは，1870年代末だからである。この仕事の大部分は，当時勢力のあった英国版新心理学，特にスペンサー流の進化論的連合主義を基盤とする新心理学の批判的考察であった。ジェームズは，この初期の批判的小論を寄せ集めて整理し，推敲と詳述を経て，『心理学原理』（1890）を完成させた。」（Reed, *op.cit.*, p. 202.＝前掲訳書，278頁。）

30) *EPh*, pp. 7–8.（ジェームズ，ウィリアム『ジェームズ論文集』（世界大思想全集　哲学・文芸思想篇15），今田恵訳，河出書房，1956年，5頁。）

31) *EPh*, p. 8.（前掲訳書，6頁。）ジェイムズはここで以下のように述べている。「外界の事実の確認は心的活動の一つの種類を形成するに過ぎない。心的活動というものは，純然たる認識的判断或いは現実の判断――事物が事実の問題として，かく存在するという判断――の外に，莫大な数の情緒的判断，理想的判断，事物はかく存在すべし又すべからずという判断がある。われわれの心的生活のどれほどが，この，より善い，より悪いという問題によって占められているか。どれほどがわれわれの側からの好き嫌いを含んでいるか。」端的にいって，ここでジェイムズが主張していることは我々が価値を問題にして生きているという事実である。

32) *EPh*, p. 11.（前掲訳書，8頁。）

33) *EPh*, p. 11.（前掲訳書，8頁。）

34) *EPh*, p. 15.（前掲訳書，11頁。）

35) *EPh*, p. 17.（前掲訳書，13頁。）「要請」という言葉を用いて行われるこうした超越論的な議論は1892年出版の『心理学要綱』（*Psychology*: *Briefer Course*）においても依然として見られる。例えば，科学としての心理学の限界を論じている箇所でジェイムズは次のように述べる。「私が自分の考える作用そのものを感じようと試みるときにはいつでも，私が捉えるものはある身体的事実（some bodily fact）である。すなわち額や，頭や，喉や，鼻から来る印象である。内的作用としての意識は感覚的に与えられた事実ではなく，むしろ要請（*postulate*）であるように思われる。すなわちこの被知者に対するものとして知者（*knower*）を要請するのである。」（*PB*, p. 400.＝『心理学』下巻，今田訳，327–328頁。）この言明は，「知者」という超越論的な要請を想定することなしに心理に関する議論が終わることはないと，1892年の時点でジェイムズが考えていたということを示している。

36) *EPh*, p. 19.（前掲訳書，14頁。）

37) *EPh*, p. 21.（前掲訳書，16頁。）

38) *EPh*, p. 20.（前掲訳書，15頁。）なお，このジェイムズの言明についてマイヤーズは「彼の初期の著作および『原理』の中でジェイムズは，典型的に意識について，それがはっきりとした性質（property）のある行為者（agency）であるかのように言及した。すなわち，「目標に向けて闘うもの」（fighter for ends）という表現が示すように彼は特にそれを，原因を表す用語で特徴付け，本来ならばより適切には人格（persons）に割り当てられるだろう一定の諸能力を意識（consciousness）に帰属させる傾向があった」と指摘している。（Gerald E. Myers. *William James. His Life and Thought*. New Heaven and London, Yale University Press, 1986, p. 58.）

39) この論文の初出は“Are We Automata?”, *Mind*, 4, 1879, pp. 1–22.である（*EPsy*, pp. 38–61.に所収）。

40) *EPsy*, p. 43.（ジェームズ，ウィリアム『ジェームズ論文集』（世界大思想全集　哲学・文芸思想篇15），今田恵訳，河出書房，1956年，49頁。）
41) *EPsy*, p. 43.（前掲訳書，49頁。）
42) このことと関連して，「感じの継起」（a succession of feelings）と「継起の感じ」（a feeling of succession）の区別に関する彼の議論も説明されるべきであろう。ここでもジェイムズは，先の「スペンサーの心の定義」論文と同様に，「心的世界と物的世界の区別」に言及している。「感じの継起」は純粋に物的な過程であるが，「継起の感じ」は内的な心的世界の出来事である，と彼は言う。例えば何かあるものよりも別のあるものが先（もしくは後）だと感じるには，「(…) 各々が他と関係をもっているばかりでなく，その関係を知っているという，各項の自己超越（a self-transcendency of each item）を要する」。物的な世界に存在するばかりでなく，関係を知っているということ抜きにしては，先（もしくは後）であると感じることはありえない。「(…) 与件（data）の自己超越が意識的形式を構成する。それが存在すると考えている所に，心がある。心がある所に自己超越がある」。（*EPsy*, pp. 43–44. = 前掲訳書，49頁。）
43) *EPsy*, p. 44.（前掲訳書，49頁。）
44) Reed, *op.cit.*, pp. 207–208.（前掲訳書，286頁。）
45) また，教育を語る様々な場面において，「関心」や「目的」という言葉がしばしば用いられるが，本稿における議論を受けるとこうした言葉づかいに孕む問題性は明らかであろう。困難を孕むから使用してはならない，という意味ではない。ここで言うのは次のような意味である。「関心」や「目的」という言葉を学術的な意味で適切に用いるとすれば，目的論的な議論の伝統に深く踏み込まざるを得ない。しかし，教育を語る時，こうした言葉なしでは語り得ない場面もあるだろう。したがって，もしこのような言葉を用いて議論を展開するのならば，それらの概念についての整理が必要不可欠となる。概念整理を伴いつつ，議論や提案を行わねばならないという困難，このような意味である。